英語動名詞の構造について*

鈴木　達也

Abstract

This is a syntactic study of an English verbal gerund, POSS-ing, within the framework of the Minimalist Program (Chomsky 1995, 2001, 2005, 2007, 2008). The present article revises Suzuki's (2013) analysis of POSS-ing schematically shown in (i), proposing that the gerund has the structure consisting of a *v*P dominated by D as shown in (ii).

(i) $[_{DP}$ D $[_{TP}$ T $[_{vP}$ *v* $[_{VP}$ V-ing ... $]]]]$

(ii) $[_{DP}$ D $[_{vP}$ *v* $[_{VP}$ V-ing ... $]]]$

Suzuki (2013) argued on the basis of the structure (i) that the EPP feature of T in POSS-ing comes from the matrix verb V (or *v*) via D as a result of serial feature inheritance. On the other hand, the present article, following Saito (2011), claims on the basis of the structure (ii) that the locus of the EPP feature of POSS-ing is *v*, and the feature is not inherited by its complement V because of the lack of ϕ-features of *v*. This analysis is more favorable in that it does not need the speculative serial feature inheritance, and the EPP difference between ordinary NPs and gerunds can be explained in terms of presence/absence of verbal projections.

＊本研究は，2014 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 による助成を受けて行なわれたものである。

1. 序

本研究は，Suzuki（2013）で提案した英語動名詞 POSS-ing の統語分析を更に発展させたものである[1)]。Chomsky（1995，2001，2005，2007，2008）により研究が推し進められたミニマリスト・プログラムの中でも，特に Chomsky（2008）の位相理論における提案に従って，拡大投射原理（以後 EPP）の視点から英語名詞句と動名詞の構造を研究するものであるが，Saito（2011）で提案された位相主要部と EPP 素性保持の提案を取り入れることにより，Suzuki（2013）における英語動名詞と EPP の分析に修正を施している。英語動名詞の構造については未だ不明な点が多く，更なる研究が必要とされるが，位相理論を用いた研究によって新たな視点が見出され，動名詞の理解がより一層深まることが期待される。

2. 動名詞と EPP

Suzuki（2013）は，Chomsky（1986）等で詳細に検討された英語名詞句と動名詞の違いについて，主に概略(1)に定義される EPP に焦点を当てて議論している。

(1) 拡大投射原理
　節は統語的主語を持たなくてはならない。

理論の変遷に従い，Chomsky（1986）当時の枠組みにおける EPP と現在のミニマリスト・プログラムにおける EPP では大きく扱いが異なるが，節には主語が必要であるという EPP の効果については不変である。英語において，名詞句の場合は(2c)のように主語は随意的であるのに対して，動名詞の場合は，(3a)のように顕在的であれ，(3c) のように非顕在的であれ，統

語的主語が必要とされ，（3b）のように統語的主語を欠く動名詞は非文である。

（2） a. They destroyed the town.
b. [$_{NP}$ their [$_{N'}$ destruction of the town]]
c. [$_{NP}$ the [$_{N'}$ destruction of the town]]
（3） a. [$_{NP}$ their [$_{VP}$ destroying the town (completely)]]
b. *[$_{NP}$ the [$_{VP}$ destroying the town (completely)]]
c. [$_{NP}$ PRO [$_{VP}$ destroying the town (completely)]]

Chomsky（1986: 116–117）では，当時の理論に基づく構造のもと，動名詞の場合は内部構造に最大投射 VP を持つことが名詞句の場合との大きな違いであり（Williams 1980，Lyons 1986 他参照），名詞句は内部構造として最大投射を持っていないため（すなわち NP ではなく N'），EPP は無関係であるとされている。

Suzuki（2013）は，Saito and Murasugi（1990，1999）や有元・村杉（2005）のように限定詞句の仮説を採用して名詞句の構造をとらえ直した場合，（2b, c），（3a，c）は（4），（5）のように表され，いずれの場合も内部構造としてそれぞれ NP と VP（または *v*P，TP）という最大投射を持つため，内部構造における最大投射の有無をもって名詞句と動名詞を EPP に関して区別する Chomsky（1986）の分析は見直す必要があることを指摘した。

（4） a. [$_{DP}$ their [$_{D}$ ϕ] [$_{NP}$ t [$_{N}$ destruction][$_{PP}$ of the town]]]
b. [$_{DP}$ [$_{D}$ the] [$_{NP}$ [$_{N}$ destruction][$_{PP}$ of the town]]]
（5） a. [$_{DP}$ their [$_{D}$ ϕ] [$_{TP}$ t [$_{T}$ ϕ] [$_{vP}$ t [$_{v}$ destroying][$_{VP}$ [$_{V}$ t] the town]]]]
b. *[$_{DP}$ [$_{D}$ the] [$_{TP}$ PRO [$_{T}$ ϕ] [$_{vP}$ t [$_{v}$ destroying][$_{VP}$ [$_{V}$ t] the town]]]]

Chomsky（1986）のように最大投射の有無が鍵であるとする分析では，名詞句の場合に，NP という最大投射を持つにもかかわらず，なぜ（4b）のように主語の無い名詞句が許されるのかが謎である。したがって，限定詞句の仮説を仮定する理論のもとでは Chomsky（1986）の分析は受け入れることができない。

3. 位相主要部と素性継承

Chomsky（2008）では，位相主要部である C が端素性と ϕ 素性を持っており，ϕ 素性は位相主要部の補部である T に素性継承されると仮定されている。T に継承された ϕ 素性が *v*P 指定辞から TP 指定辞に主語を移動させる探査子となり，EPP 効果を引き起こすと考えられている。

しかしながら，Suzuki（2013: 370）が指摘するように，Chomsky（2008）の分析はそのままの形では動名詞の分析に当てはめることができない。なぜなら，Stowell（1981）が指摘するように，動名詞は C を持っておらず，属格主語を持つことを考えれば，外側の機能範疇は C ではなく D を持っていると考えられる。(6)が示すように，remember は間接疑問節を補部に取ることができる動詞であるにもかかわらず，動名詞の場合は，(7)が示すように，どんな種類の動詞的動名詞であれ，ことごとく非文となっている。

(6)　No one remembers [what [John ate t last night]].

(7) a. *No one remembers [what [John's eating t last night]. (POSS-ing)

b. *No one remembers [what [John eating t last night]. (ACC-ing)

c. *No one remembers [what [PRO eating t last night]]. (PRO-ing)

しかしながら，EPP 素性が一般的に D にあると仮定することは妥当ではない。なぜなら，同じく D を持つと考えられる名詞句には EPP 効果が見ら

れないからである。

以上のことから，Suzuki（2013）は，動名詞における EPP は D が位相主要部として元々持っている特性ではなく，動名詞を補部とする更に外側にある位相主要部から素性継承によってもたらされたものであるとする分析を行なった。具体的には，「素性の連続継承」とも呼ぶべき，主節の動詞からの D を経由した動名詞部分の T への EPP の継承である。この分析では，D は単なる EPP の中間キャリアーとしてのみ機能しており，D の補部に NP がくる名詞句の場合には T が無いので EPP 効果は見られないが，動名詞が補部となる場合は T があるので，主節から継承された EPP 素性が D を経由して T に継承されるというものである。

4. EPP と位相主要部 *v*

主節動詞からの素性継承を利用した Suzuki（2013）の EPP の分析では，POSS-ing 自体が主語として現れる(8)のような例を説明することが難しい[2)]。主語位置と動詞との間には選択関係は存在せず，例えば(8)の主語位置に現れている John's kissing Mary の内部にある T に主節の動詞から EPP 素性が継承されたとは考えにくい。

(8)　John's kissing Mary annoyed her parents.

Suzuki（2013）はこの点について満足のいく解決法を示していないが，論文末尾で異なる視点からの代案を示唆している。本稿では，この示唆に基づき，Saito（2011）による「EPP 素性が C と *v* に保持される」という提案も踏まえた上で，POSS-ing における EPP について考えることにする。

Saito（2011）は，EPP 素性を C と *v* に仮定した上で，日本語のように φ 素性を欠く言語においては素性継承は行なわれず，EPP 素性が C と *v* に保持さ

れるという提案をしている。前者については，例えば(9)のような文において，数量詞の作用域の方が否定の作用域よりも広くなるのは，(9)が(10)のような構造を持っており，数量詞がTPの指定辞ではなくCPの指定辞にあり，否定の作用域から外れるためであるとしている[3)]。

(9)　全員が自分自身に投票しなかった（と思う）

(10)　[$_{CP}$ 全員$_{i}$が [$_{TP}$ t_i [$_{NegP}$ [$_{vP}$ t_i [$_{VP}$ 自分自身に　投票し]] な] かった] C]

仮に数量詞がTP指定辞にあったとすると，英語の例である(11)のように日本語でも作用域の広さに関して曖昧性が生じても不思議ではないが，(9)の日本語の例では作用域の広さに曖昧性は生じない。この違いは，EPP素性が位相主要部であるCからTに継承される英語のような言語と素性継承が行なわれない日本語との違いであるとSaito（2011）は主張している。

(11)　Everyone didn't take the exam. (Every＞Not, Not＞Every)

一方，後者については，「自分」の先行詞が主語指向であることを，*v*P指定辞が主語であると仮定した上で，*v*がEPP素性を持つために主語が*v*P指定辞に併合されるとSaito（2011）は主張している。(12a-b)は複文の構造を持つと考えられている使役文の例であるが，いずれの文でも主節の主語に加えて被使役者である「太郎」も「自分」の先行詞になることができる。元々非対格動詞である「死ぬ」「転ぶ」の補部位置にあった被使役者の「太郎」が「自分」の先行詞になることができるという事実は，「太郎」が*v*P指定辞に存在した段階があり，その場所で「主語」のステイタスを獲得していることを強く示唆している。(12a-b)は，それぞれ(13a-b)のような構造を持っていると考えられる。

(12) a. その医者は太郎を自分の家で死なせてしまった。
b. 介護人が太郎を自分の部屋で転ばせてしまった。

(13) a. [$_{TP}$ その医者$_i$ は [$_{vP}$ t_i [$_{VP}$ 太郎$_j$ を [$_{vP}$ t_j [$_{VP}$ 自分の家で t_j 死ぬ] v] させ] v] てしまった]
b. [$_{TP}$ 介護人$_i$ が [$_{vP}$ t_i [$_{VP}$ 太郎$_j$ を [$_{vP}$ t_j [$_{VP}$ 自分の家で t_j 転ぶ] v] させ] v] てしまった]

Saito（2011: 56）は，vP の領域で EPP 効果が見られるのは ϕ 素性を持たない日本語のような言語に限ったことではなく，例えば英語においても，(14) のような受け身の文においては，v が ϕ 素性を持たないため EPP 素性を保持しており，そのため直接目的語は vP 指定辞に併合されると主張している。

(14) a. There was a book stolen.
b. There was [$_{vP}$ a book$_i$ $v_{[EPP]}$ [$_{VP}$ stolen t_i]]

(14) では，stolen の目的語である a book が stolen よりも前に位置しているが，これは v が持つ EPP 素性のために stolen の補部位置から vP 指定辞の位置へ a book が移動したためであると考えられている。

以上，Saito（2011）の EPP の分析を踏まえた上で，次に Suzuki（2013）の末尾で示唆された代案の視点からの分析について考察していこう。

Suzuki（2013: 377）は，Chomsky（1986）の洞察に立ち戻り，動名詞における EPP 効果では動名詞内部に動詞の投射があることが一定の役割を果たしていると示唆した。この分析では，POSS-ing の EPP 効果は，補部の V や v から T が受け継いだ動詞性（[＋verbal]）と主節から継承した EPP 素性の相互作用によってもたらされたものであると考えられている。POSS-ing の場合はその内部構造に [＋verbal] の T があるため EPP 効果が見られるが，名詞

句の場合は内部構造に [＋verbal] の T は存在せず，したがって EPP 効果は見られないことになる。

動詞性を仮定する分析は，Chomsky（2008）の素性継承のシステムを採用しているため EPP の説明には T が必要であった。しかしながら，Saito（2011）の提案を踏まえれば，*v* は φ 素性を持たないため EPP 素性を保持できるのであり，かつ *v*P 指定辞が主語位置として考えられるのであれば，POSS-ing 内に T を仮定する必要も無いかも知れない。そうなると，(5a) の構造は，(15) のような構造であると考えることができる。

(5) a. $[_{DP}$ their $[_{D}\ \phi\ ]\ [_{TP}$ t $[_{T}\phi]\ [_{vP}$ t $[_{v}$ destroying $]][_{VP}$ $[_{V}$ t $]$ the town $]]]]$

(15) $[_{DP}$ their $[_{D}\ \phi\ ]\ [_{vP}$ t $[_{v}$ destroying $]][_{VP}$ $[_{V}$ t $]$ the town $]]]$

(15) において，*v*P 指定辞に基底生成された主語の their は DP 指定辞の位置に移動しているが，これは属格の認可のためであって EPP によるものではないと考えられる[4)]。

POSS-ing の内部構造として T の投射が必要かどうかは明らかであるとは言い難い。Suzuki（2013: 371）は，POSS-ing での T の投射を仮定しつつも，Schueler（2004: 9）が指摘した POSS-ing における文副詞の使用の方言差を紹介している。

(16) a. %I was worried about John's probably being a spy.

b. %Mary's certainly being pregnant worries me.

(16a-b) では，probably，certainly といった文副詞が POSS-ing 内に現れているが，%の表示が示すように，これらの文の容認度には方言差が見られる。

加えて，動名詞における否定の not が現れる位置も注目すべきである。定形節では，(17) のように否定の not は助動詞の have や be よりも後に現れるが，

動名詞の場合は，（18）のように have や be よりも前に現れる[5)]。

（17）a. John has not done the homework yet.
　　b. John was not appointed to the Captain of the new ship.
（18）a. John's not having done the homework yet may upset his teacher.
　　b. John's not being appointed to the Captain of the new ship surprised everyone.

定形節においては，（17）のように助動詞 have と be はそれらが助動詞の最初の要素である場合，T へ移動するために否定の not よりも前に現れる。（18a-b）の POSS-ing において，否定の not の方が have や be よりも前に現れるという事実は，have や be の T への移動が起きていないと考えられるが，これは（15）のような T の投射が欠如しているとする分析と矛盾するものではない。以上のことから，本稿では，Suzuki（2013）が提案した（5a）のような構造を改め，POSS-ing は（15）のような構造を持っていると提案する。

4. 帰結

本稿では，POSS-ing を取り上げたが，英語には主語が対格で表示されるもう一つの動詞的動名詞である ACC-ing が存在する。

（19）　I don't like John speaking ill of others in the office.（ACC-ing)

（19）のような ACC-ing は，多くの研究者が指摘するように（Horn 1975, Emonds 1976, 1985, Schachter 1976, Reuland 1983, Abney 1987, Suzuki 1988, Pires 2006 等）POSS-ing よりも節の性格が強い。本稿の提案と関係する部分では，まず，果たして POSS-ing のように D の投射が存在するのかどうかという疑

問がわいてくる。ACC-ing もその分布を見ると（20）のように格が付与される位置にしか現れないという特性があり，D の投射の存在が示唆されるが，主語が属格で表示されていない点も含めて慎重な検討が必要である。

（20）　I'm proud *(of) my son entering the prestigious university.[6)]

次に検討すべき点は，ACC-ing における T の有無である。本稿の分析では，POSS-ing には T は存在せず，*v* が EPP 素性を保持していると仮定した。しかしながら，POSS-ing よりも明らかに節の性格が濃いとされる ACC-ing も T の投射を欠いているのかどうかについては，慎重な検討が必要である。仮に ACC-ing に T が存在しているとすると，EPP 素性，あるいは素性継承のシステムに関しても検討すべき問題が数多く生じてくると思われる。これらの問題は，次の研究の中心的課題となるものである。

5. まとめ

本稿では，ミニマリスト・プログラム（Chomsky 1995, 2001, 2005, 2007, 2008 他）の枠組みに基づいて英語の動詞的動名詞の一つである POSS-ing の統語的分析を行なった。Suzuki（2013）が POSS-ing に対して提案した概略（21）のような構造に修正を施し，*v*P が D に支配される（22）のような構造を提案した。

（21）　$[_{DP}$ D $[_{TP}$ T $[_{vP}$ *v* $[_{VP}$ V-ing ... $]]]]$

（22）　$[_{DP}$ D $[_{vP}$ *v* $[_{VP}$ V-ing ... $]]]$

Suzuki（2013）は，（21）の構造に基づいて，POSS-ing の T が持つ EPP 素性は素性の連続継承の結果，D を経由して主節の V（または *v*）から継承さ

れたものであると主張したが，本稿では，Saito（2011）の提案に従って，(22) のような構造に基づいて，POSS-ing の EPP 素性は *v* に存在し，かつ *v* が φ 素性を欠いているために *v* から V への EPP 素性の継承が行なわれず，*v* に保持されていると主張した。この分析は，素性の連続継承のメカニズムを排除することができ，また名詞句と動名詞の EPP に関する違いを動詞の投射の有無によって説明することができるという利点があり，Suzuki（2013）の分析よりも好ましいと思われる。

注

1） 英語の動詞的動名詞には主語を属格で表す POSS-ing と対格で表す ACC-ing の二種類があるが，本稿では主に POSS-ing のみを取り上げる。

2） この点は元々 Suzuki（2013）の匿名査読者によって指摘されたものである。この場を借りて，あらためて感謝の意を表したい。

3） 例文(9)，(11)，(12)，(14)は，Saito（2011）からの引用である。

4） 属格主語の DP 指定辞での認可については，Suzuki（1988）で提案された Definiteness Principle に言及した Suzuki（2013: 375）を参照されたい。

5） 否定の not の方が have や be よりも後に現れる(ia-b)のようなパターンも非文ではないと思われるが，(18)のように否定の not の方が先に現れるパターンの方が好まれるように思われる。

(i) a. John's having not done the homework yet may upset his teacher.
b. John's being not appointed to the Captain of the new ship surprised everyone.

6） *(of)の星印は，of を削除すると非文となることを示している。

参考文献

Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.

有元將剛・村杉恵子（2005）『束縛と削除』，東京：研究社。

Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, New York: Praeger.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2005) "Three Factors in Language Design," *Linguistic Inquiry* 36, 1–22.

Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interfaces+Recursion=Language: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, New York: Mouton de Gruyter.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, Cambridge, MA: MIT Press.

Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, New York: Academic Press.

Emonds, Joseph (1985) *A Unified Theory of Syntactic Categories*, Dordrecht: Foris Publications.

Horn, George (1975) "On the Nonsentential Nature of POSS-ing Construction," *Linguistic Analysis* 1, 333–387.

Lyons, Christopher (1986) "The Syntax of English Genitive Constructions," *Journal of Linguistics* 22, 123–143.

Pires, Acrisio (2006) *The Minimalist Syntax of Defective Domains: Gerunds and Infinitives*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Reuland, Eric (1983) "Governing *-ing*," *Linguistic Inquiry* 14, 101–136.

Saito, Mamoru (2011) "Two Notes on Feature Inheritance: A Parametric Variation in the Distribution of the EPP," *Nanzan Linguistics* 7, 43–61.

Saito, Mamoru and Keiko Murasugi (1990) "N'-deletion in Japanese: A Preliminary Study," *Japanese/Korean Linguistics* 1, 285–301.

Saito, Mamoru and Keiko Murasugi (1999) "Subject Predication within IP and DP," *Beyond Principles and Parameters: Essays in Memory of Osvaldo Jaeggli*, ed. by Kyle Johnson and Ian Roberts, 167–188, Dordrecht: Kluwer Academic Press.

Schachter, Paul (1976) "A Nontransoformational Account of Gerundive Nominals in English," *Linguistic Inquiry* 7, 205–241.

Schueler, David (2004) "Extended-Projection, Categorization, and the English Morpheme *-ing*," paper presented at WECOL 2004.

Stowell, Tim (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.

Suzuki, Tatsuya (1988) *The Structure of English Gerunds*, Doctoral dissertation, University of

Washington.

Suzuki, Tatsuya (2013) “On Genitive Subjects in English,” *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito*, ed. by Yoichi Miyamoto et al., 361−380, Tokyo: Kaitakusha.

Williams, Edwin (1980) “Predication,” *Linguistic Inquiry* 11, 203−238.